

# 『守られなかった約束』

ノリコ

陽ざしは、やさしかった。  
まだ、春は浅い。  
ひんやりとした朝の空気の中で、陽の当たったところだけが、暖かかった。

彩香は、昨夜の気だるさを感じながら、身体を起こして、ベッドの端にすわった。

かすかに寝息が聞こえてきて、ゆっくりと振り返ってみる。

隣には、彼が眠っていた。

彼の柔らかなほほに、手の甲を当ててみる。

ピクンと彼は動いた。だが、目覚める様子はない。

若い肌だった。

羨ましく、まぶしいほどの若さだ。

しかし、こんなことをいつまでも続けていていいものかどうか、彩香は不安だった。

夫には、不満はなかった。

でも、何かしら物足りない。

それが何なのか、今の彩香にはよく分らなかった。

自分は世間的に幸せなほうだと思う。それなのに、この物足りなさはどうしてなのか……。

彩香の夫は三歳年上で、サラリーマンだ。

職場では、若手に混じって働き盛りである。

専門的な営業職なので出張が多く、行くとなると必ず一晩泊まりになるのだった。

彼は、夫の出張を知ると必ずやって来た。

いつも、私たちは手をつないで二階に上がる。

昨夜も彩香が先に寝室に入り、彼をベッドに招き入れようとした。が、なにをためらったのか、なかなかベッドに入ってこようとしなない。

仕方ない。彩香が彼の名前をやさしく呼ぶ。

彼は、弾かれたように抱きついてきた。

「ああ……」

ベッドが悲鳴をあげた。

彩香は、大きく伸びをした。

こんなにゆったりとした朝は、久しぶりだ。

夫はいないし、忙しい彼も今日の予定は入っていない。だから「明日の朝は、ゆっくり寝かせてあげるね」と彼に約束した。

二人だけで過ごせるこの幸せを、彩香はまだまだ楽しみたかった。

その時……。

玄関の方でガチャガチャと、音がしたような気がした。

「まさか！」

寝室の扉を開け、階段の下をのぞくと、そこには夫の姿があった。

彩香は声をあげそうになり、あわてて口をおさえる。(彼は、まだ寝ている……)

後ろ手に扉を閉め、急いで階段を下りた。

「どうしたの、夕方じゃないの？」

声があわずり、つい詰問調になってしまう。

「昨日のうちに契約が取れてしまったんだ。そのご褒美に上司が休みをくれたから、朝一番の新幹線に乗ったのさ」

にこやかに語った夫は、次の瞬間、顔色を変えた。

何かを感じたように、大またで階段を上がっていく。

彩香は必死に夫を止めようとしたが、間に合わなかった。

バシン！

扉が大きな音を立てて、開けられた。

夫は、寝室の中に入り、ベッドの掛け布団の端をつかんで、思いつき引きはがす。

遅れて部屋に飛び込んだ彩香は、とても正視できずに両手で顔を覆った。

彼は眠そうな目をこすりながら、夫を見た。

あまりの驚きに、声を失っている。

凍りついた空気の中、彼が言い放った。

「ボク一人で寝る約束を破ったのは悪いけど、ママがね、来ていいよ……。それに、今日は幼稚園が記念日でお休みだから、朝寝坊させてあげるってママが約束してくれたんだ……起こすなんて、ひどいよ、パパ！」